

The Awakening におけるエドナの自殺を巡る多義性の解釈

原口, 遼

<https://doi.org/10.15017/2559296>

出版情報 : 文學研究. 92, pp.27-51, 1995-03-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

The Awakening における エドナの自殺を巡る多義性の解釈

原 口 遼

1

〔評価の高まり〕 Kate Chopin (1851-1904) の秀編 *The Awakening* (『目覚め』、1899年刊) は近年とみにその評価が高まって来ている。アメリカ本国での『目覚め』の受容史に関しては、最近の批評論集においても Wendy Martin や Nancy Walker が簡潔にまとめているが、¹ わが国の学会においても『目覚め』の重要性は広範に認められて来たようである。しかし、その作品内容については、これまでのところさほど詳しく論じられてはいず、各種の文学史においてもまだそれなりの位置づけがなされていない。論文としては、同志社大学の佐々木隆氏がいち早く取り上げた事があるが、² 氏は主として作品の結末をめぐる論じている。即ち、氏はエドナの最後の自殺の意味に関して、エドナに対して共感的肯定的な立場を取る Seyerstead と、³ 否定的な立場を取る Spangler⁴ の両者の論文を折衷する形で、氏自身の考えを提出しているが、氏によると『目覚め』には「生の瞬間」の次にはすぐ「死の瞬間」が、「死の瞬間」の次には「生の瞬間」が用意されるという形でストーリーは展開していて、エドナの自殺は、作品内に流れる「生の旋律」と「死の旋律」という相対立する二つの旋律が相高まり重なり合った地点に捉える事ができるとしている。しかし、エドナの自殺の必然性およびその意味の多義性については、納得の行く説明をしていない。そこで小論においては、小説最後におけるエドナの自殺の必然性とその意味について考察を加える。その事は必然的に、エドナのそれまでの人生の考え方と行動のパターンを跡づける作業を要するであろう。

〔何にどう目覚めたのか〕 なぜエドナが自殺したのかと考えるに当たって、まず第一に、本小説のタイトルが“The Awakening”であることに導かれて、エドナにおける一連の「目覚め」が、自殺へと繋って行ったのではないかと考えることは、ごく自然な着想であろう⁵。従って、その様な観点から小説を読んでみると、前半部分においては、エドナが制度としての結婚生活と云うものに対して次第に不満を抱き出し、独立した人格を持った女性としての権利に「目覚め」出したことが、彼女のその後の一風変わった行動の濫觴をなしている事が確認される。例えば、エドナは夏の間にはヴァカンス地で若い青年のロバートから文字通り手を取り足を取りして水泳を教わり、それを習得する過程において自己に潜在していた肉体的能力に「目覚め」たわけだし、ロバートと戯れの恋愛をしているうちに、株のブローカーをしている仕事人間で、年齢差もあり、何かにつけ保護者ぶっついていて強圧的な夫との関係には欠けていたロマンティックな恋心を「目覚め」させられ、密やかな肉体のうずきにすら「目覚め」させられたとされる。

更に、エドナは夏のバカンスが終わって、ニューオリンズの自宅に戻ってからは、夫のニューヨークへの出張中に、おんなたらしの悪評のあるアロービンと付き合いだし、彼が不誠実な男と知りつつも、色男の眼差しや愛撫による官能の陶酔に「目覚め」させられる。

小説の最後の方では、‘mother-woman’の鑑ともいふべき Adèle Ratignolle の赤子の出産に立ち会いながら、女と言う存在は、出産において母としてその子と生物学的紐帯で結びつけられていることに「目覚め」させられる。そして最後には、エドナが純粹に愛情を感じられたロバートにも去られてしまうのだが、その時、エドナは純愛といい、刹那的陶酔といい、結局は煩わしい結婚生活や家族制度の桎梏へと繋がるべからざるもののだと言う点では、現在の嫌悪している夫との関係と同じ事になってしまうだろう事に「目覚め」させられる。

そうした様々の「目覚め」の過程で、エドナは自己の孤独なる魂に「目覚め」させられるが、それにしても究極の「自己そのもの」の存在は疑い得ず、その

自己を貫こうとする根深い衝動に突き動かされて、ついには現世のすべてに絶望しつつ、なおかつ解放感に満たされながら、海の彼方へと、泳ぎ入ったのだ…と。

かくして本小説の最終章（第39章）はエドナの自殺のくだりを扱っているのであるが、この時、我々読者が、彼女より受ける印象は一種の諦念と敗北感であると同時に、不思議に解放感に満ちた清澄な感覚である。それは、彼女が早春の浜辺の光と風の中で真裸となり、夏の間には習い覚えた遊泳術でもって、自らの意志で沖合いに向かって泳いでいくからである。これが、例えば断崖からの墜落死であれば、敗北と悲惨の印象は強いであろう。そしてエドナの自殺が「泳いで行って死ぬ」と言うことには、後述するように必然性があるのである。

ところで、エドナは果たして本当に「目覚め」たと言えるのだろうか。そこで彼女にとって「目覚め」とは何だったかといった疑念を一旦提出してみると、実はエドナが「目覚め」るところか、頻繁に居眠りをしている事、⁷白昼夢に耽る傾向がある事、しょっちゅうお腹を空かしては幼児的に“I am hungry.”を連発する事、容易に感激したり、逆に飽きっぽかったりする事、時にはヒステリーを起こして物を投げつけたり、壊したりする事、反抗のための反抗のような行為をすること、衝動的逃避的な行動をする事等々から、エドナの「目覚め」自体が、持続的、思索的なものではなく、かなり間欠的なものであり、感覚的、直感的なものである事が分かって来る。

〔Narrator の stance の曖昧さ〕 それでは読者はどのようにしてエドナの行動と思想を見ればいいのか。小説の最初の方では、本書の語り手はエドナの夫のレオンスの事に関して、レオンスは妻を「所有物であるかのように見た」と次のように記しているが、そこでは語り手が、エドナが夫の支配下において物として見られていた事を示そうとしていると感じられて、このエピソードは後にエドナが夫の事を支配的、保護者的として反抗するに至る伏線とされていることが分かる。つまり語り手はエドナの境遇に共感的調子でこうした場面を描いていると言うことができる。

“You are burnt beyond recognition,” he [Mr. Pontellier] added, looking at his wife as one looks at a valuable piece of personal property which has suffered some damage. (4)

またエドナの父については、彼の態度が強者たる家父長の論理を持ち、抑圧的、強圧的、命令的で、女性たちの置かれた状況や感受性に対して鈍感であり、例えば妻の気持ちを理解しないものであって、そうした旧弊な態度が妻を早くに死なしたのだと、明確な上にも明確に説明されていて、そこには語り手の女たちへの同情と同時に、こうした頑固な老父たちへの批判的な態度が表わされていると言える。

“Authority, coercion are what is needed. Put your foot down good and hard; the only way to manage a wife. Take my word for it.”

The Colonel was perhaps unaware that he had coerced his own wife into her grave. (71)

一方、エドナの自殺の場面が描かれる最終章（第39章）に至ると、語り手の説明的表現は完全に消え去り、エドナの行動と感情に関しては純客観的な描写になり、彼女の内面の思考や自殺の理由などについては明確にされない。つまり最終章においては、それまでの筆致とは違って、語り手は登場人物に対して肩入れしているわけでもなく、さりとて批判的でもない。従って、それまでの語り手のエドナに対する共感的な描き方からして、そうした純客観的な描写には、いわばエドナと読者の双方がともに突き放された事から来る一種のアイロニックな感じが残ると言えるであろう。（このことがエドナの死を巡る曖昧さと多義性を生み出している最大の理由の一つになっているわけだが、特に最後の章におけるこうした文体上の変化について、注意を払う批評家は余りいない。）

それにしても、こうした多義性より、本小説の読者は巻を置いたときに、エドナの死の意味を自分なりに受けとめ、解釈し、エドナの死を小説全体のパースペクティヴの中に位置づけざるべからざるの衝動に駆られる。かくして、こうした意味の多義性を生み出す本小説の結末は「アメリカ小説中最も多義的な結末」(‘the most ambivalent conclusion in all American literature’)⁸ などと呼ばれたりしているわけである。

2

【エドナと作者ショパンの違い】 結末の曖昧性をどう解釈するのかと言う事に関して、一つの手がかりとして、少しわき道に逸れるかも知れないが、エドナの生き方と作者ショパンの生き方を対比してみることで、作者のエドナへのスタンスを解釈する一助とする事はできないだろうか。なぜなら、本小説の語り手は、無論作者と全く同一とは云えなくても、作者の立場を色濃く反映している部分が多い小説のように窺えるからである。そこでショパンの伝記等を調べてみると、⁹ ショパンはエドナに同情しつつも、その生き方に距離を取っている、そしてしかも優越的な立場に身をおいている事が分かる。

- ① ショパンは、エドナと違って夫との間にさほど年齢差はなく（6歳差）、また心の交流もあった。そして銀行家だった夫の Oscar は、妻を理解し、優しい男であった。
- ② ショパンは、小説中、自分の二人の子供に愛情を注がないでいるエドナと違って、子沢山であり（6人の子供がいた）、意外にも家庭婦人の Adèle Ratignolle 的であった。
- ③ ショパンはエドナと違い、アマチュアの芸術家でなくプロの作家であり、お金の稼ぎ手だった。またかろうじて自活できる程度の職業的ピアニストの Reisz 老嬢とも違い、性格的にぎすぎすしてもいなかった。
- ④ エドナの夫は商用でニューヨークに長期出張するが、ショパンの夫のオスカーは、ショパンが31歳の若さでマラリアで死亡しており、たとえショパ

ンが夫の死後、若後家として、自由恋愛をしたにしても、それは勿論姦通にはならない。

一方、エドナとショパンが類似しているところも、勿論多い。

- ①二人とも、内陸部の出身（エドナはケンタッキー出身、ショパンはその東隣のミズリー州出身）で、クレオールと結婚してニューオリンズに住んだ。
- ②二人とも、若干不良少女風のところがあり、当時としては異例のこととして町中をシャペロンなしで一人で散歩するのが好きだった。
- ③二人とも、社会慣習や制度に反抗的で、当時としては女性としては珍しいことだが、煙草を嗜んだ。
- ④二人とも、男好き、酒好き、そしてゲーム好きで、そもそもエドナがアロービンに出会うのが競馬場であった。
- ⑤二人とも、美人で身体的魅力があった。
- ⑥二人とも、近所の人達を家に呼んで、ホームパーティやサロンを開くのが好きだった。例えば、ショパン夫婦がルイジアナ州の Natchitoches に住んでいたとき、ショパン家は社交界の中心で、ケイトは女主人として会話、社交、音楽の腕で中心的人物を務めたという。¹⁰
- ⑦エドナとアロービンとの関係と類似した浮いた艶っぽい関係が、夫の死の直後、暫くの間あったのではないかと伝記作家達は推定している。

こうしたところから、職業作家ショパンは、同じく肉体的魅力はありながら、独立した生計を営むほどの職業的才能を持たなかったエドナに対して、その不満や反抗に対して同情を示しながらも、彼女を高みから、距離を取って眺めている事が知られる。そうした作家の立場から来る、エドナの振舞いへの微妙な態度が、本書の各所においてアイロニーのある文体上のトーンを生み出しているのだと言えよう。

3

[抑圧からの逃走] さて、エドナの思考、感情、行動様式の特徴を捉えよう

と試みると、前半（グランド・アイル島の事が描かれている1～16章）では、「家父長制下の権力的男達の抑圧からの逃走」と言う方向性を持っている事が分かる。勿論、この「逃走」は、後半に至ると「逃走」といった受け身的なものでなくなり、積極的能動的なものに変質して行くようであるが。

この抑圧への目覚めと逃走とを、エドナを巡る4人の男性達、及び2人の女友達との関係で点検してみよう。というのもエドナの自殺への道行きは、端的にはエドナの男性遍歴（娘として、妻として、愛人として、恋人として）による新たな世界観の獲得、及び同性たる女性達の生き方への、同性故の嫌悪と反発の結果¹¹と見なしうるからである。

〔父からの逃走〕 「抑圧からの逃走」の事を考えると、まず父の権威の支配する抑圧的な家庭生活、即ち家父長的な家族制度そのものからの逃走がある。エドナの場合、これは宗教や厳格な躰よりの逃走と言い変える事ができる。エドナはケンタッキーの長老派の、極めて宗教的な雰囲気のある家庭に育つわけだが、毎日曜日、牧師の父の行うお祈りの場より、緑の牧場に逃げだしたと云うことが記されている。勿論エドナにとって牧場は抑圧からの解放の場であって、小説の最後、海原を泳いでいるときも、緑の草原をかき分けつつ進んでいるような幻覚を覚えた¹²と記述がなされていて、青海原の解放的な側面が強調されている。またエドナの父は南軍の元大佐であるが、エドナの夫のレオンスに対し、「妻をしつけるには権威と強制が必要なのだ」（71）と叱咤する。語り手のコメントとして「彼はその厳格さが妻を墓場へと急がせたことを知らなかった」（71）と記されているので、語り手はエドナのこうした境遇に同情し、家父長制度における父なる権威からの彼女の逃走に共感的と言うことができよう。またさらには母の早世によって、エドナは母からの自然な愛情に恵まれず、父の庇護と抑圧の下、対立的・反抗的な性格を助長させられるとともに、自衛としての強権からの逃避といった行動様式を、知らず知らずのうちに獲得させられたものと言える。

エドナがポンテリエと結婚したのは、「ポンテリエが熱心に求婚したため」

(19) と言うこともあるが、「カトリック者との結婚に父と姉とが反対したことへの反動から」(19)とも記されているので、エドナは、愛情の欠けた抑圧の家族に、反抗のために反抗するとともに、衝動的に結婚へと逃避したと解釈する事ができる。

〔夫からの逃避〕 次に夫の抑圧からの逃走がある。夫の抑圧とは、端的に結婚制度より来る抑圧と言うことができる。即ち、エドナは、

- ①夫が家長として、結婚生活の経済を支え、妻や子を監督し、従順を要求する事に対し次第に抑圧感、不満の念を募らせている。
- ②夫が仕事人間で、家事と子供のことは妻に任せきりで、自分は頻繁にクラブに出かけ、妻を一人ぼっちに放っていることに対して、鬱積した不満を持っている。つまり、妻への情愛とコミュニケーションを欠く事等に対して、結婚生活を無意味で空虚と感じ、言葉にならぬ抑鬱感と不満感を抱いている。

一方、夫のレオンスだが、彼は「抑圧的」とは言っても、決して粗暴とか暴君的というわけではなく、むしろ当時の家庭人としては、平均以上の男性といってよいであろう。なぜなら、レオンスは金銭的には鷹揚であって、子供達には手土産を絶やさず、妻子の健康に注意を払い、仕事熱心であり、エドナを除いた一家の者達（使用人達を含めて）には人気があり、むしろ他人目によれば「世界中で最良の夫」(9)と呼ばれていたくらいなのだから。

こうした夫であるからには、エドナは一応満足して暮らしていたのだが、グランド・アイル島で、夏のバカンスの間に知りあった年下の青年ロバートと戯れの恋愛をしているうちに、エドナは初めて夫への不満を募らせる。

このグランド・アイル島でのエピソードには、アメリカ内陸部（ケンタッキー）において長老派の教義の下で育てられた抑圧的で、感覚的な喜びをむしろ悪とするピューリタンの感受性と、ニューオリンズの開放的で享乐的なクレオール達の物の考え方の違いが対比的に書き込まれている。そしてその夏のバカンス地での風俗、習慣、雰囲気等は、エドナの抑圧的感覚の解放に大いに資するの

である。

4

〔クレオール達の風俗習慣〕 例えば、ニューオリンズのクレオール達については、次のように説明されていて、それはエドナのその後の「ご発展」の下地とされているわけだが、エドナのようなピューリタンの厳格な宗教的な雰囲気の下に育った者にとっては、エキゾチックで物珍しかった事であろう。

- ①クレオールの社会は人間関係が家族的で緊密である。
- ②彼らは会話があげつろげで、およそ慎みというものがない。例えば主婦達は自分のお産の時の体験談についてもあげすけに喋ってしまう。
- ③いかがわしい本を回し読みしては、おおっぴらに話題にする。
- ④一方、クレオール社会のパラドックスとして、上述のような開放性にも拘らず、クレオールの妻達は結婚制度に忠実で、夫に対して極めて貞節心が固いので、従って夫達も妻たちのことを嫉妬する必要がないということがある。

この様にして、例えばクレオールのレオンスは、妻のエドナがロバートと二人切りで泳ぎに行ったり、二人切りで夜更けまで話込んでいたりしても一向に意に介さない。一方、ロバートもグランド・アイル島に夏のバカンスにやってくる女性達をあしらう術を心得ていて、戯れの恋の戯れたる事を心得ている。しかしエドナは、そうした社会の部外者であることから、そうした戯れの恋を真剣なものとして受け取るかも知れないと言う危惧の念が、ロバートの周辺からほのめかされる。そのうちロバートの指導の下、泳ぎの術を身に付けるや、自分の思わぬ肉体的力に目覚めたエドナは、ロバートとの優しく新鮮な肉体的な接触によって恋心を育み出し、同時に心の通わぬ夫に対して反抗的になって行く。かくして、エドナは、抑圧的結婚制度や夫の情愛のなさに不満を持ち出し、そうした制度下での生活に反抗し始めたといつてよいであろう。

一方、夫は妻の突然の反抗に手を焼き、家庭医の Mandelet 氏に助言を求め

るが、老医師は「エドナは似非インテリと付き合ってはいませんか」(66) 等と、当時の feminist たちなら呆れ返るような事を尋ねた挙げ句、「妻に逆らわぬよう、できるだけ一人にしておくように」(66) 等と助言をする。つまり、ショパンは当時台頭していた“New Women”の新潮流とそれへの一般人の反応の両者とを明らかに念頭において本小説を書いている事が知られる。また本小説を書くのに、Ibsen の『人形の家』や『ヘッダ・ゲイブラー』や George Bernard Shaw の女性たちの社会的「目覚め」を描いた諸作品からの影響を指摘する批評家もいる。¹²つまり『目覚め』はエドナ¹²の感覚方面の目覚めとともに、女性達の自立への願望といらだちという社会的コンテクストをも視野に入れて書かれていることは確かなので、こうした方向性をも含めてエドナの最後の入水は考察されなければならないであろう。

【色事師に仕掛けられた姦通】 夫はそのうち所用でニューヨークに出かけるが、夫の不在中、エドナは旅先の(夫でなく!) ロバートのことを片時も忘れない。一方、現実生活では、競馬場でふと知り合った女たらしのアロービンに言い寄られ、このプレイボーイの手練手管によって、遂に身を任してしまう。

(2人の子持ちで、結婚6年目に入っている主婦としてはぼんやりしている感じは否めないが。) キスの場面については「(アロービンのキスは) エドナの官能が応え得た初めてのキスであり、彼女の欲望に火を付けた燃え上がる松明の火だった」(83) と記されているし、両者が急速に懇ろな仲になってからは「アロービンの話は、エドナを赤面させるくらいであったが、それはしかし彼女の内部で蠢きだした動物性 (animalism) に訴えた」(78) と書かれているので、ショパンの、人間の内奥に巣くう動物性への認識には、当時の1890年代の時代的主潮であった naturalism の考え方と軌を一にするとところがあると言えよう。この時のエドナの内面について、作者は短い章 (Ch.28) を設けて説明しているが、その時、エドナはさすがに、周囲の家具調度などを眺めながら、そうした経済的生活を支えている夫の非難、若い恋人のロバートの憤りの事等を考え、「アロービンのキスは愛のキスでなく」(83)、「自分にとってアロー

ピンは全く意味はない」(77)と記され、エドナがそのレベルの理解には到達していた事が明らかにされている。

無論、このアローピンとの浮気は、それまでの厳格な父、心の通わない夫、家父長制的家族制度等の抑圧的世界よりの「逃走」の延長線上にある事は確かだが、一方、この辺からは「抑圧からの逃走」という次元を越えて、エドナはむしろ甘美な情緒と感覚方面の刺激をむさぼっているとも言える。或いは、抑圧に甘んじて来た受け身の人間から、積極的に感覚を解放しアヴァンチュールに踏み出そうとしていると云う意味では、能動的、いやむしろ amoral でアナキックな人間に変身して行っていると言えよう。(つまり、エドナは、アローピンとの関係において、ただぼんやりとしていたというのではなく、関係が深まるにつれて、次第に物を考えるようになり、また相当に積極的、能動的になって行き、夫や結婚制度に対し強く、意識的にラジカルに反抗していると言える。)

さて、エドナは、勿論こうしたアローピンとの利率的にして感覚面な関係のみに満足できるわけではなく、つい最近帰郷したと聞く恋するロバートの事で胸が高鳴る。

〔純情な青年に積極的に仕掛ける恋愛〕 ある日、エドナは町外れの公園で、ロバートと思いがけず邂逅し(104)、その後、二人はエドナの 'pigeon house' で抱擁し合うが、この時、ロバートは当時のカトリック下のニューオリンズでは極めて困難であるにもかかわらず、エドナに夫よりの離婚をほのめかす。しかしその時、エドナは「私はもう夫の持ち物でなく、私は自分で決めたときだけ動くのよ」(106~107)、「もし夫が、ほれ妻をやるから受け取れロバートと言ったら、あなた達二人を笑ってやるわ」(107)等と、冷徹な自己主張とも自暴自棄的な強がりとも取れる、意味不明の言を吐く。この時、エドナは、「二人が愛し合う事以外、この世の他の物は一切問題ではない」(107)などと言っているので、とりあえずは今この恋愛の恍惚に没入し酔いしれていたいという、刹那主義的恋愛至上主義者になっていることは解る。¹³しかし現実問題としてエドナがはたして夫と離婚してくれるのかどうか、その後の新生活をど

う設計するののかについては、皆目見当がつかず¹⁴（エドナがアナキステックになっている以上、一貫した将来の展望は望めないはず）、これでは、気の弱い若いロバートならずとも相手が務まらないはずである。

5

〔“Mother-woman” への反発〕 さて、今度はエドナを取り巻く女性達のことを考えてみる。まずアデレはニューオリンズの薬種屋の店主の妻であるが、彼女は‘mother-woman’の典型として描かれている。‘mother-woman’とは、自己の存在をひたすら消し去り、夫と家庭生活を崇め、子供に奉仕する家庭婦人の謂であって、アデレは常々、子供達の衣類を縫う事に余念がなく、彼女の引くピアノですら芸道や自己自身の喜びのためですらなく、けなげにも子供達や家族の団欒のために必要だからとされる。アデレはいわば家庭婦人の鑑でもあるが、しかしエドナは、何ら内面性がなく「生の狂乱」（‘life’s delirium,’ 56）を味わう事も絶えてないであろうこうした家庭婦人に対し、羨望どころかむしろ退屈と哀れみを覚えてしまうのである。

またエドナは既に二児を持ちながら、子供達には余り興味を示さず、「子供達の犠牲になる気はない」（48）、「お金や私の人生を子供に与える事はあっても、自分自身までを捨ててしまう事はない」（48）と言い放ち、「本質的自己」を保持する決意は固い。この様にして、エドナは“mother-woman”を軽蔑し、むしろそうした種族からわが身をできるだけ引き離そうとしているのだと言える。

〔職業婦人への反発〕 次に職業的ピアニストのライツ嬢的存在は、エドナの認識にどのように働きかけているであろうか。ライツ嬢のピアノの芸は、エドナの素人的絵画の能力とは違って、人を感動させる力をもっているし、また実際ライツ嬢はピアノの演奏で生計を立てているようでもある。ライツ嬢は、趣味の絵を習得し自活のつてにしようと思いつエドナに対して「芸術家になるには本物の才能と、立ち向かい挑戦する勇気が必要だ」（63）とか「偏見や伝

統の上に舞い上がるには丈夫な翼が必要だわ」(82) 等と忠告する。確かにかく言うライツ嬢自身は、こうした「才能と挑戦的な勇氣」を持ち合わせているのであろうが、その代償として彼女は豊かな人間性を犠牲にしている。なぜならライツ嬢はピアノの技倆でみんなを感動させる一方、容姿は醜く「短気で、喧嘩好きの女性」(26) であり、彼女の住んでいたアパート近くの八百屋の言では「最も不快な女だった」(59) とされているからである。かくして、エドナは 'mother-woman' にも 'woman artist' にも幻滅感を抱き反発する事になる。エドナは、女として自由で、独立的生活を模索しながらも、女としても、娘、妻、情婦、母という役割の中で振る舞うことを要求され、さりとて女一人で社会に生きる事を考えてみても、当時の状況として生計を立てる職業的才能に恵まれているわけでもなければ、社会の伝統と偏見に対して挑戦できるほどの強い精神を持っていたわけでもない。もし理想の生活なるものがありとせば、頼みの綱とすべきは、今や相思相愛のロバートである。

[恋愛の帰結としての女の出産] そのロバートだが、ロバートとエドナとは、町外れの公園での邂逅の後、夕方になってエドナの「鳩の家」に行き、二人の間に強い愛情の存在することを確認し合う。そしてまさに consumation 寸前という場面で、エドナはアデレの陣痛が始まったという緊急の知らせに、その出産に立ち合うべく、ロバートを後に残してその場を外す事になる。

アデレの出産に立ち会いながら、エドナは女に課された出産と言う苛酷な生物学的な仕事を再認識し、また女は出産することで、家族の中に組み込まれるを得ないこと、女にとって子供の存在は切っても切れぬ関係にあること等について考えさせられる。そして女に課せられた出産という「自然の法則」(109) への強い反発を感じながら、数時間経って「鳩の家」に戻る。しかし、エドナを待っていたものは、今はもぬけの殻の空虚な居室だけであった。

[無力な恋人のロバート] ロバートはエドナが留守にしている間に、「愛する故に、さようなら」などという責任回避の書き置きを残して、その場から姿を消してしまっていた。恐らくこの場面で、エドナが得た認識とは、勿論ロバ

トが自分の本当の気持ちを理解してくれなかった事（本当の気持ちと言っても、実はそれがどのようなものかはロバートにも読者にも分かり難いのだが）への落胆もあるだろうが、恋愛感情と結婚制度にまつわる堂々めぐりの憤懣と諦念ではなかつただろうか。即ち、色の恋のと言っても、その行き着く先は、所詮結婚、出産、育児などの家庭生活、夫への隷属、親類縁者や世間とのお付き合い等々の煩わしさの連続になってしまう事、結局、自分の全的な欲求——経済的独立と自由、情熱と官能の充足、同時に純愛と献身の獲得、なおかつその上に夫や子供に縛られない精神的自由と言うこと——を同時にすべて満たすような生活形態はこの世にあり得ない事等々である。

それに現実レベルの問題としては、夫の出張よりの帰宅後のごたごた、¹⁵もつれた愛人関係、子供達の将来への影響の事等々、そうした事どもも考えなければならなかつたであろう。そうした堂々めぐりの思いめぐらしが、感覚と感性のみ過度に豊かで、知力も職業的才能も生半可なものでしなかつた女、エドナの無念の認識の内容ではなかつただろうか。

〔エドナの入水〕 かくして翌朝エドナは意を決して、グランド・アイル島へ渡り、あらゆる関係から解放されようとして、衣類も何もかも脱ぎ捨てて、我が身一つで海の中へと歩み入る。この様にしてエドナは、小説の冒頭来、終始高く低く呼び掛け続けていた *sensuous* で、誘惑的で、疲れた心と肉体とをそのままに包んでくれそうなホイットマン的な海の呼び声¹⁶へと、知らず知らずのうちに引き寄せられ、身をゆだねたのである。

6

〔倫理的な清算と言う側面〕 さてそれでは、上のようなエドナの辿った歩みから、最後の入水自殺の意味を考えてみよう。勿論、入水自殺には、アローピソとの姦通、ロバートとの浮気などのダブル姦通への、人妻としての罪の意識があるであろう。また、子供たちの将来に対して母の姦通が与える影響、不面目なことを考えれば、名誉を保つためにも一つの責任の取り方が求められたの

かも知れない。(フォークナーの *The Mansion* における de Spain と密通した Eula Varner の自殺のように。)

〔夫、愛人、恋人への抗議〕 次に自分の生き方に対して、無言の圧力を掛け続けた夫への抗議の意味があろう。例えば、ハンモック事件 (Ch.11) で、夜半過ぎ、自分にかしずいてくれたロバートとの会話の余韻を楽しむべく、戸外のハンモックの中にいたがるのに、寝室に戻るよう、夫が暴力的にはないが、葉巻と時間の力によって無言の圧力を掛け続けた事等への抗議の意味があろう。その夫が支配する結婚制度の壁の厚さは、冒頭の鳥かごの中の鳥の比喩に明らかに象徴されている。¹⁷

かくして最後のシーンでエドナは衣服をはぎ取り海に入る。確かに衣服をはぎ取れば、それらは夫が経済的に与えてくれているものだから、夫の支配からは逃れられると言った考えがエドナにはあるのだろう。しかし身体髪膚は、(夫でなく) 親が授けたものであり、(子供を生む事で) 子供達への責任もある以上、人が裸になればそれですべての責任から全部解除されるというわけではないが、そのことをエドナはほとんど顧慮していないようである。従って恐らく、エドナのその様なジェスチャーには、何はともあれ、夫からの経済面、精神面での支配が最も嫌悪すべきものとして、意識の前面に出て来ているものと考えられる。¹⁸

〔愛人、恋人への抗議〕 愛人のアロービンに対しては、愛情のない中で肉体関係を持ってしまった事に対して、自分がお引きずりと言うより、むしろ結婚と云った制度そのものに反抗的であってラジカルなのだと言う意味を通して、自らの行動へ自分なりの、過激なけじめを付けたと考えられるであろう。

恋人ロバートに対しては、彼が逃げ去った直後の自殺だけに、彼への恋心はかりそめのものではなかったと云う純粋な心を伝えるとともに、相手の臆病さと自分への moral support をしてくれなかった事に対する当てつけの意味が出て来るであろう。

つまり、男達に対して、最後の自殺は決して逃避ではなく、一種の主張と強

い意志を誇示するものとしてのエドナ像を結ぶであろう。つまり、エドナの死が弱々しい敗北的なものでなく、あくまで意志を貫くもので、抗議と抵抗としての意味とジェスチャーを持つ事が示されていると言える。それは、彼女が自らの力によって力一杯に沖合いへと泳いで行く行為に現されて、こうした点から、このエドナの自殺行を解放と勝利と受け取る批評家が出て来るのも理解できる。

【体験に知的に意味付けを与える責任感のある女】　しかし、エドナは「目を覚まし、そしてその結果として苦しむことになっても、一生夢幻想に惑わされているよりは、やはり眼を覚ました方がいいのです」(110)とも言っているから、彼女にとっては、体験と云うものは回避するより直面し、経験した方がよく、平凡と安逸よりもむしろ苦悩と“delirium”の方を求め続け、しかし、あくまでもその責任は自ら引き受けて行くというような意味で、一種責任感のある女であるとも言えよう。

【部外者によるクレオール社会の誤解劇】　エドナはクレオールの男性と結婚して、金銭的には満たされ、開放的な会話や肉体的な接触という点において感覚を解放されながら、一方でクレオールの案外に厳しい貞節の観念を誤解し、遊戯としての恋愛を恋愛次元に留めておく事ができず、思わず姦通を犯してしまったと言える。そしてその責任を取るに当たっては、元々戒律が厳しく、罪意識の強いアメリカ内陸部のプレスビテリアンのピューリタンの尺度を当ててしまったわけで、彼女の悲劇は、その様にして文化的なギャップの中で起こった悲劇 (tragedy of manners) と云える側面もあるであろう。つまり、事件の場が、クレオールの町のニューオリンズとそのバカンス地のグランド・アイランドに設定されている事、そしてエドナが内陸部のケンタッキー地方のプレスビテリアンの出である事は、勿論偶然の地理的な場所というのではなく、意味のあることなのである。

【精神分裂病的なところ】　エドナには、もともと熱中症の中にも、時々投げ遣りになり、現実との繋りをなくするような精神分裂的な兆候があり、精神の

高揚の次には、往々にして depressed するところがあった。例えば、子供の面倒を見ているときでも、子供との一体感に満足感と感激を覚えると同時に、次の瞬間にはそれへの関心を失い、子供達に自分の領域を侵犯させてなるものかなどと考えたり、盛大な別れの儀式の晩餐の席でも、アンニユイと絶望と孤独の感覚に襲われたりするるのである (88)。

〔虚無感〕 彼女には、人生が破滅へと向かうような、その様な感覚に襲われることがあった。例えば次のような箇所に窺われるように。

There were days when she was unhappy, she did not know why, — when it did not seem worth while to be glad or sorry, to be alive or dead; when life appeared to her like a grotesque pandemonium and humanity like worms struggling blindly toward inevitable annihilation. (58)

こうした一種ショーペンハウエルのな世界観、即ち、この世が破滅へと向かっていると云った感覚や虚無感は、エドナの人生へのグリップ力を失わせるものであっただろう。こうしたところから、エドナの自殺は、エドナの日常を知る第三者には、むしろ気が触れたためと受け取られる余地が残されよう。

〔単に Narcissitic な身振りとはいえない〕 そして、確かにエドナが、海浜で最後、裸体になるところなどは、夫からの束縛をかなぐり捨てると言う意味と同時に、自己満足的な narcissitic などところも勿論あるであろう。(Cf. Margret Mitustani)¹⁹ 例えばそれは、絵が職業的な画家のように描けなかったという彼女にとっては、衣類をはぎ取り、海浜に立つ事で、自分自身が絵そのものになったというナルティスティックな、錯覚すらあったのではないだろうか。しかしそれは、自殺の一つの理由にはなりうるが、これまでの考察から、それはあくまで死ぬ一つの理由であり、それも最大の理由ではないという事が分かる。

【泳ぎ入って死ぬという自殺の不自然さ】　そもそも、彼女は、水と死を恐れていた、また、これまで見てきたように、自己への規律、自己を律するところは確固としたものでなく、相当に甘いので、意志的に沖まで、泳いで行って、力尽きて死ぬと言った自殺は、不可能であろうし、最後の場面が、自殺の完遂の場面だとすると、リアリティはないと言える。なぜなら、エドナの場合、反抗は、先述したように、衝動的なもので、持続的、思想的なものではないのだから、泳いで行って、いわば死ぬまで泳ぎ続けると言ったいわば意志的持続的な行為は不可能であろう。（この事に関しては、この非リアリティをどう受け取るべきかという事に関して議論した拙論を参照されたい。²⁰）

【裸体で泳いで行って死ぬことの着想の卓拔さ】　しかし、エドナの入水の意味を、もし積極的に捉えるならば、最後の自殺は、エドナが現身のわが肉体の上に、一にして多、多にして一という不可能な夢を託し、そうした事を可能性に転じるに当たって、どうしても障害となって立ち現れて来る、自己の肉体的存在なるものを限りなく零にしようとした、そうした意味を持つ超越的身振りとして受け取る事ができるであろう。この場合、一にして多とは、前述した、お互いの相矛盾するような全的な欲求——経済的安定、情熱と官能の充足、純愛と献身、その上に全き自由と言うこと——と言ってもほぼ同じことである。

【入水の積極面】　更には入水は、女の sensuality を満たす行為だったとも思われる。その感覚の解放のなかで、エドナは子供時代に牧場へ抜け出たときと同じ解放感を覚えるのである。このことについては、ホイットマン的な海の描写がされている事については先に触れた。かくして、勿論、自殺の理由は、十分に本人の口からは明らかにされぬまま、何やら開放的な雰囲気の中で、エドナは麝香の香りに包まれて、小さく溶暗していくのである。²¹

かくして、小説の最後の一節は、エドナの自殺をどう解釈するかと云う事に関して、微妙かつ重要な一節と云う事になる。従って、いまそれを煩瑣をいとわず引用しておきたい。次が最後の一節である。

泡立つ波が彼女の白い足先にまつわり、くるぶしの上まで、蛇のように巻き上げてくる。

彼女は水に入っていった。水は冷たかった。だが、彼女は進んでいった。水が深くなった。白い臍を浮かせて、彼女はゆっくりと水をきって泳ぎ始めた。誘惑者のように、海は柔らかく、やさしく、彼女の臍を抱擁する。

エドナは泳ぎ続けた。……あの牧草の中を、あてどもなく歩き続けた子供の自分を思いだしていた。あの時、牧草の畑には、始まりも終わりもないと思った。

夫や子供のことが心をよぎった。彼らは私の命の一部にはちがいない。だからといってわたしのすべてが、彼らのものである必要はない。

……

疲労が強い、負けそうだ。

……

遙かな浜を見た。…父の声を、姉のマーガレットの声を聴いたと思った。すずかけの木に繋がれた老犬の吠え声を聴いた。ポーチの上を歩く、騎兵将校の拍車の音を聞いた。蜂の唸り声²²があって、麝香に似たせきちくの香りが、辺り一面に漂っていた。

8

この小説の最後の部分に関して、若干の分析を加えておく。

①まずエドナがまずホイットマン的な海の呼び声、海の抱擁、海の優しさに誘惑されて、それを快しとしてある意味でうっとりとして身を任せていることである。文中の「蛇」は英文学の常套的比喩として性的な誘惑を意味していると解釈できる。

②泳ぎながら「牧草の中を、あてどもなく歩き続けた子供の自分を思いだしていた」と云う箇所は、彼女が海の中で水をかき分けながら、身体を自由にし

て解放されている事、記憶の中の原っぱである青海原で、恍惚の状態のままに永遠の今に漂っている事を意味しているように思われる。

③「夫や子供のことが心をよぎった」にも拘らず、エドナは「彼らは私の命の一部には違いない。だからといってわたしのすべてが、彼らのものである必要はない」と考える。これは、エドナがこれまで言い続けた事の繰り返しであるが、内心の要求のままに「自己自身」を保持し続けよと説いた、エマソンの「自己信頼」的な主張である。しかしその「自己信頼」の最終結果が、エマソンの云う自己発展ではなく、自己破壊的な自殺ということであれば、エドナの論理はその意味が分からなくなる。少なくとも、私達が、理解できるエドナの論理とは次のような事であろう。これまでのダブル不倫にしても、それらは自分が自らの選択によってやったことであって、それは私自身の意志の領域に属する事なので夫や子供の出て来れる領分ではない。自殺も自らの責任で行うのであるから、家族の出て来る場合でもないといったほどの論理である。つまり、これでは、主張のためには器物の破壊や自己破滅も辞さないという点で、アナキストの論理である。つまり、エドナはアナキストとして、超絶的志向の下に死んで行ったわけである。

④父や姉のマーガレットの声を聴いたと云う事は、死に臨んで最も近い肉親の事が思い出されたと云うことを意味している。しかしここに母の声が現れないところに、これまでエドナの愛情を繋ぎ留めてくれる存在が不在だったという事が示されている。

そして、これまでもエドナの身内の人達は、エドナに対して叱責はしても、愛情は注いでくれなかったようなので、エドナが死んでから後も、もし彼らからまず声に出てくるものがあるとすれば、そうした非難、叱責の類であるような気がして、エドナは最後まで 'a solitary soul' のままに留まる。

⑤「ポーチの上を歩く騎兵将校」とは、彼女がケンタッキーにいた頃、憧れていた隣家の恋人を訪れていた青年で、これはもちろんエドナの少女時代のケンタッキーの風景の一齣を現している。それはその前の老犬の吠え声と同じで

幼少時の風景である。それはエドナが本質的に恋する女、そして夢見る女であった事を意味している。つまりそれは、骨がらみになったエドナの限りないロマンスを求める心情を意味しているであろう。

⑥「木に繋がれた老犬の吠え声」とは、そのようにして、自分も縛られていた事、そして意志はあれど自由に行動できなかつた存在の哀れさを象徴していると思われる。その様にして、犬は老犬、そしてその声は寂しげに聞こえて来るわけである。

⑦最後の最後、エドナは麝香の匂い、せきちくの薄桃色の中に溶暗する。これはやはりエドナは一種の涅槃に入ったと云う事、つまりそれはせめてもの語り手のエドナ的存在へのはなむけ的な同情心を示すのだと思われる。

このように、エドナは終始一貫して拘束された状態からの解放を願い続けており、そしてそれは最終的に海へと、反抗の身振りの中に、無時間の世界へと乗り出して行く事だったのである。

かくして、海に裸体で泳ぎいり、海に抱かれつつ、過去の幼児期の思い出の中に失神するという、最後の自殺の意味付けは、一つ二つに明確に絞り切れるものではなく、またその最後が、勝利なのか敗北なのかという議論はかなり単純化され一面的であることが分かる。つまり、エドナの死はその生とともに、思いのほか多義的であり、かくして小説のエドナの最後を描く文章は限りない曖昧さをはらんで、私達の想念にいつまでも訴え続けるのである。恐らくは、エドナを包み込んでいつまでもたゆとう青海原の波のごとくに。

註

- 1 Wendy Martin, introduction, *New Essays on 'The Awakening'* (Cambridge: Cambridge University Press) 1-31; Nancy Walker, introduction, *The Awakening* by Kate Chopin (Boston: Bedford Books, 1993) 3-18.
- 2 Takashi Sasaki, "Challenge to the Taboos: A Study on the Ending of *The Awakening* (Originally in Japanese)," *Studies in American Literature*, No.17 (Tokyo: American Literature Society of Japan, 1980) 74-86.
- 3 Per Seyersted, *Kate Chopin: A Critical Biography* (Louisiana State U. Press, 1969) 149.
- 4 George Spangler, "Kate Chopin's *The Awakening*: A Partial Dissent," *Novel*, III (Spring 1970) 254-255.
- 5 テキストは Kate Chopin, *The Awakening* ed. Margaret Culley (New York: Norton, 1976) を使用。
- 6 本小説の原題は "A Solitary Soul" であったと言われる。See Daniel Rankin, *Kate Chopin and Her Creole Stories* (Philadelphia: U. Press of Pennsylvania Press, 1932) 171.
- 7 例えば、エドナは夫の出張中にエマソンを読もうとするが、いつの間にか睡魔に襲われる (73)。エドナはまた教会の中でも眠くなるし (36)、その後、島めぐりをしているときも、随分長い午睡をしている (38)。
- 8 Barbara Ewell, "Kate Chopin and the Dream of Female Selfhood," eds. Lynda Boren, and Sara Davis, *Kate Chopin Reconsidered: Beyond the Bayou* (Baton Rouge: Louisiana State U. Press, 1991) 164.
- 9 主として Per Seyersted, *Kate Chopin: A Critical Biography* (Baton Rouge: Louisiana State U. Press, 1980) による。特に②に関して、ショパンが長子を生んだときの感激と喜悦を思えば、エドナが第38章でアデルの出産についてそれを外的に傍観的に観察していて、子供を産む女の母となる喜びを全く感じていない事は、エドナについては特異的と言えよう。

"The sensation with which I touched my lips and my finger tips to this soft flesh only comes once to a mother. It must be the pure animal sensation; nothing spiritual could be so real ...so poignant." See Per Seyersted, *ibid.*, 40.

- 10 Lynda Boren, "Taming the Sirens: Self-Possession and the Strategies of Art in *Kate Chopin's 'The Awakening'*" eds. Lynda Boren, Sara Davis, *op.cit.*, 186.
- 11 ショパンは知的な女性にときどき見られる、むしろ男性的な優越的な立場から同性たる女性達を見下すと云う形での同性嫌いの傾向性を持っている。
- 12 Martha Black, "The Quintessence of Chopinism," *Kate Chopin Reconsidered: Beyond the Bayou*, eds. Lynda Boren, and Sara Davis (Baton Rouge: Louisiana State U. Press, 1991) 95-96.
- 13 「私はもう夫の持ち物でない」とエドナはいわば啖呵を切るわけであるが、ロバートと関係すれば、多かれ少なかれ、ロバートの持ち物になる、即ち拘束しあうわけであるから、エドナがロバートを求める態度には矛盾がある。従って、私は「エドナは取り合えず利那主義の恋愛至上主義になっている」と言うのである。
- 14 背景には離婚を認めないカトリックの教義の下での結婚制度がある。当時のニューオーリンズでは、人口10万人に対し離婚は僅か29名だったとされる。Cf. Margaret Culley, "The Context of The Awakening," *The Awakening* ed. Margaret Culley (New York: Norton, 1976) 118.
- 15 奇妙な事は、小説中、エドナが夫のレオンスと正面切って喧嘩したり、衝突する場面は殆どないと言うことである。ハンモック事件にしても、レオンスは喧嘩することなく、エドナが自ら折れて部屋に入るまで、ハンモックの脇で葉巻をふかし続けるだけである。恐らく、そのことは夫のエドナへの支配力がとてつもなく大きく、夫に面と向かう事などエドナには到底できなかつた、それだけ鬱積した不満は大きかつたと言うことを意味していよう。

例えば、最後のエドナの自殺にしても、これまでに一度も妻の不満足、抗議らしい抗議の言葉を直接聞いたこともない夫のレオンスにとっては、そのニュースは文字通り寝耳に水であつたらうし、ましてや妻がアローピンやロバートと浮気をしていた事など夢にも思わなかつたはずである。
- 16 Cf. Walt Whitman, "Song of Myself," Section 22, *Leaves of Grass*, ed. Sculley Bradley, and Harold Blodgett (New York: Norton, 1973) 49-50.

You see! I resign myself to you also ... I guess what you mean,
I behold from the beach your crooked inviting fingers,

I believe you refuse to go back without feeling of me,
 We must have a turn together, I undress, hurry me out of sight of
 the land,
 Cushion me soft, rock me in billowy drowse,
 Dash me with amorous wet, I can repay you.

これと『目覚め』第6章の海の描写を比較せよ。「海の声は誘惑者のそれだ。声は常にやむことがない。…海の声は人の魂に語りかけ、海の感触は、柔らかく、親しげに人の体をか抱いて、官能のはてしない世界へと誘い込んでいく。」(15)

- 17 第1章で、籠の中のおうむは誰に向かってか知らないが「出て行け！出て行け！」とクレオール言語であるフランス語で叫んでいる。
- 18 概してエドナは経済的、金銭的問題に関して相当うるさいようである。
 ①例えば、彼女が別れの宴会をする場面がある (Ch.30)。この時は、エドナの誕生パーティでもあるが、その費用は夫に請求すると彼女は言っている。つまり、夫の家で開く誕生パーティの費用は、たとえそれが自分の夫の家を出て行く儀式だったにしても、それは夫が支払うべき物と考えるのである。
 ②「鳩の家」に入ってから、これは自分の実家筋のお金と自分の絵を売ったお金で手にした家だから、ここで私が何をしても自由で、夫から指図される筋合いの物ではないと言った考えがある。つまり、所有物の所属についての意識は、極めて潔癖なので、そうした理由からも、死ぬに際して裸になる事には、自分は夫の与えてくれた物を一切身に纏っていません、と言った意思表示があるものと思われる。
- 19 Margeret Mitsutani, "Kate Chopin's *The Awakening*: The Narcissism of Edna Pontellier," *Studies in English Literature*, English Number, 1986 (The English Society of Japan, 1986) 3-16.
- 20 そもそもエドナは水と死を極端に怖れていた。またこれまで見て来たように自己を律するところのものは確固としたものでなく、彼女の行為は基本的に逃避であり、反抗とは云っても衝動的であり、従って意志的に持続的に沖まで泳いで行って、力尽きて死ぬと言った自殺は不可能であろう。最後の場面が、自殺の完遂の場面 (=水死) だとするとリアリティはないと言える。この自殺の非リアリティを、必要としての一つの文学的虚構だとして述べた拙論を参照されたい。『九大英文学』No37 (1994. 12) 1-12.
- 21 Flaubert の *Madam Bovary* におけるボヴァリー夫人の死の場面と類似した客観描写。

しかしボヴァリー夫人の場合、彼女の死は、医学的、科学的に、冷静に外面的に記述されるが、エドナの場合、その感覚、感情、記憶や過去の情景や聴覚などが、エドナの内面に立ち入って描写される事が違っている。つまり、作者は非難にしる、共感にせよ、エドナの内面に擦りより、同情的に描いているといえる。

- 22 杉崎和子訳『めざめ』牧神社 1977年を利用して貰った。記して謝意を表す。